白山だより

教育目標
深く考える子供
仲よく助け合う子供
最後までがんばりぬく子供

創立八十周年記念式典（式辞より）

校長　逢坂　健太郎

かがやきの森のどんぐりが、日ごとに大きくなってきています。秋分の日を迎え、少しずつ秋の気配を感じるようになりました。

全校の皆さん、今日は、白山小学校ができてから八十年、人間で言えば八十歳になったことをお祝いする日です。「ありがとう」という気持ちで、心に残る一日にいたしましょう。

さて、私は一年生と同じ、この四月に白山校に来たばかりです。たった半年ですが、この学校に来てとても驚いたことがたくさんありました。今日はその中から、三つのお話をします。

まず一つ目、「決して新しくはないけれど、皆さんが校舎をとてもていねいに使っていること」です。作文を紹介します。

『新校舎へ入ると、先ずコンクリートの臭いが鼻をつく。床板がきれいだ。こんな足で入るのがもったいないようだ。新しい。新しいのだ。壁がまっ白い。雪のようだ。このきれいな学校。白山校をきれいに使おう。僕等はこの学校と共に栄えて行くのだ。そしてこの白山校の先祖になるのだ。』

これは、八十年前の昭和七年、初めて新しい校舎に入った時のことを、当時五年一組だった山本さんという男の子が書いた作文です。新しい学校ができた嬉しさ、よーし、新潟を代表する立派な人になるぞ、という意気込みが伝わってくる作文です。新潟地震のために校舎は建て替えられましたが、「学校をきれいに使おう」という心は、八十年経った今も、皆さんの心に受け継がれています。

二つ目の驚いたことは、「学校に、とても手入れが行き届いたたくさんの樹木があること」です。一時は、新潟地震によって、学校の木がほとんどなくなってしまったそうですが、今は百十種類、約四百本の木や花が学校の中にあります。

『おとなになったきみたちが、なつかしい白山校をたずねた時、きみたちの育てた木は、喜んで、木の葉をゆすってきみたちを迎えるにちがいない。木をかわいがって育てようね。「わたくしの木だもの」と誇りをもっていえるように。』

昭和四十九年五月、当時の片野二郎校長先生のこの言葉から始まった「ぼくの木わたしの木」の活動は、四十年近くたった今も続いています。学校のたくさんの樹木が今も元気に育っているのは、受け継がれてきたこの活動の中で、みんなで「ぼくの木わたしの木」を大切に育ててきたからだと思います。

さて、驚いたこと、最後の三つ目です。それは、「白山校の子供たちは、とても挨拶が上手だということ」です。また、作文を紹介します。

『わたしの今年のめあては、返事とあいさつです。わたしは、「はい」や「いいえ」の中でも「はい」を大切にしたいです。そして、あいさつをすると、した人も、された人もとても気持ちがよくなります。だから、家の中だけでなく、外でもきちんとあいさつができるようにがんばります。』

これは、今から三十年前に、五年一組だった川吉さんという女の子が書いた作文です。川吉さんが言っているとおり、挨拶は人と人との心を通わす始めの一歩です。このことは、いくら時が流れても変わることはありません。今、皆さんはきちんと挨拶ができる。ぜひ大人になっても、家族や友達だけでなく、地域の人たちにも進んで挨拶できる人になってください。

さあ皆さん、十年後、二十年後、二十年後は創立百周年です。そのもっと先、五十年経っても、皆さんが、「白山校はわたしのふるさとだ」と堂々と胸を張って言っている、そんな大人になっていることを心から願っています。

「創立80周年記念式典」（H24.9.22）

「お祝の集い」
卒業生　藤田明様の独唱